

『飯能の明治百年』



埼玉県飯能市に在る観音寺（真言宗智山派）だが、家系調査の一環として同寺を調べていくうちに、高松宮殿下が昭和28年5月21日に同寺を訪れていることを知った。そこで皇室と同寺の繋がりを知りたくなり、家にあった『飯能の明治百年』を紐解いたところ、渋沢栄一の従兄弟・渋沢喜作（成一郎）が振武軍総帥として飯能で西軍と戦い、さらに箱館（榎本武揚）で戦い降伏していたことを知った。その飯能戦争によって江戸の身代わりに焼き討ちとなった飯能に対する、明治帝の思い入れは殊の他深かったようであり、明治神宮の造営が代々木に正式に決定するまでは、飯能町へ明治神宮を誘致する運動で盛り上がったほどであった。以下は同書からの一部抜粋。

明治天皇羅漢山

天皇の英姿山頂に輝く

明治十六年四月十八日夜がしらじらと明けそめたころ、飯能地方一帯に砲声がとどろき、羅漢山のふもとは、兵隊の汗みどろの白熱戦が展開されていた。羅漢山々頂で明治天皇は、その戦況をザーッと見つめていた。陸軍特別大演習である。御乗馬姿のこのとき羅漢山々頂に立たれた明治天皇の英姿は、朝日にはえて、まこと御光がさして、その当時の飯能町民にとって終生忘れ得ない感激であったことが想像され、しかもこの大みいつの下に汗まみれ、泥まみれで奥武蔵一帯に激戦をくりひろげた将兵が、弱少日本を日清、日露の大戦に勝ち抜いたのだから、飯能の明治百年史には特筆大書し、永遠に忘れ得ぬ記録としてとどめておきたいものである。明治元年に振武軍が立てこもり、悲壮な敗戦だったとはいえ、徳川の恩義にむくいるための心のこもったこの羅漢山々頂を、明治天皇みずから陸軍大演習の御野立て所に選ばれたことに大きな意義のあることを飯能市民は、いまいちど飯能のむかしの価値を考え直してゆきたいものだと思う。そのときから、羅漢山は天覧山と呼ばれるようになったのである。天覧山に建てられてある御野立て所記念碑を読んでも、**「明治十六年四月十八日、明治天皇が御登臨され近衛諸兵の対抗演習を親閲されてより、この山を天覧山とよぶことにした。」**とあり、碑面はこの地方出身の衆議院議長粕谷義三、碑背の文章は第一高等学校長教授の岡田恒輔が達筆をふるっており、建碑責任者は、当時の陸軍大将で鮫島重雄男爵だったことをみても、飯能にとってまことに貴重な天覧山であり、飯能が天下に誇り得る観光地であることを市民は再認識すべきである。

誠意こもった飯能町

明治十六年四月の飯能は、てんやわんやの大さわぎだった。「一天万乗の大君」がおでましになるというのと「皇軍の偉容」がまのあたり観戦できるという感激は町中にただよって、町をあげての明治天皇奉迎の準備に忙殺されていた。飯能町長小山八郎平が、御用途一般総かつとなり、小能家の吉敬、正三がその補佐役、平沼兼雄、木村新五郎が庶務をつかさどり、双木家の八郎康哉が徴発令物件係という準備万端の大役を受け持った。このとき一さい記録として書記を担当したのが金子重助、小川三五郎、篠原兼八、新井栄吉、粕谷福太郎らで、町内を指揮し、いろいろな用度に専念した人達には、河原町小山源三郎、一丁目篠原幾太郎、二丁目小川仁平、三丁目加藤宗次郎、宮本町加涌啓太郎、原町双木貞之助などが記述されている。それにもまして大変だったのは、行在所になった金子忠五郎宅であった。御用室にされたのは、南面八畳間で南にろう下があって、西は床の間と押し入れ、北と東はフスマ。庭先にはマツを多くしその他花木をいっぱい埋めて風致をそえたというから、大工、左官、経師、庭師が感激の腕をふるって造作したことであつたらう。このほかに、おつきそいの伏見宮能久親王が小能實吉方、

宮内郷徳大寺実則が山川真三方、米田侍従長はじめ侍従が小川与平方などから、そのほかおえら方は、篠原半助、小山新太郎、金子弥吉、小川善五郎、小川種吉方に宿泊された。そのときの感激をむかしの家伝にしている家々を思うとやはり明治物語りを生かしてゆきたい。

御心ゆすぶる羅漢山

江戸城総攻めの官軍が、錦の御旗をひるがえして箱根の山まで進んできたとき、単身敵の陣中に乗り込み、西郷隆盛とひざづめの談判をして、みごと、いくさをくい止めたのは山岡鉄太郎であった。その山岡鉄太郎は、振武軍の飯能戦争もおさまり、明治初年のある日、宮中で明治天皇と静かな対談のひとつをすごしていた。山岡鉄太郎はそのとき侍従の職にあった。話題はたまたま、幕府の末路上野の彰義隊からきりだされたが、山岡は意識的に、話題を振武軍の飯能戦争へと展開させた。

西郷隆盛の努力で江戸の焼き討ちはまぬかれたとはいえ、武州羅漢山に立てこもって悲壮な敗戦のため、飯能村は焼き打ちにひどい悲惨な戦火に見舞われたことなど、くわしく「武州飯能の悲劇」を涙のわく思いで奏上した。明治天皇の御心には、このときの山岡鉄太郎の話題で、武州飯能という土地の名が強く焼きついたらと拝察しても過言ではあるまい。山岡鉄太郎がなぜ明治天皇に、飯能戦争のことを強く印象づけようとしたことには、江戸城総攻めくい止めに成功し、山岡の身がわりを振武軍の立てこもった羅漢山の本陣能仁寺にさしむけ、参謀渋沢平九郎と対決させたからであった。その使者は十津川の乱の落武者池田謙次郎といわれているが、虚無僧姿で参謀と話し合いを進めようとしたのだが、その日は飯能戦争終戦の前日で、山中登を隊長とした特別攻撃隊はすでに出発、参謀の渋沢平九郎にも停戦を統一するには、手のほどこしようもなかった。特別攻撃隊を追ったこの虚無僧が攻撃隊に追いついたときは、飯能は真っ赤な火の手。虚無僧のねずみ色の行衣が血に染まり見事な切腹だったという秘話もある。

演習地裁断は武州飯能

江戸のいくさを見事くいとめた山岡鉄太郎にしてみれば、振武軍の陣中に虚無僧姿で池田謙次郎を身がわりに派遣し、江戸城総攻めのときの西郷隆盛の役にはまる渋沢平九郎と談判させ、飯能の町に戦火を止めさせ、徳川のめんもくを保たせようとしたのだったが、ついに江戸の戦火を飯能に引き受けさせる破目になってしまった心の傷手はいつまでも続いたのであろう。日本軍隊の統卒がすべて天皇の大権となった明治十四年、西南戦争が終って間もないときであった。近衛諸兵の陸軍大演習御統監のことについて宮中で近臣会議が開かれた。まっさきに右大臣岩倉俱視は、小倉の原がまことに適地であることを申しあげた。続いて侍従山岡鉄太郎は「振武軍決戦の地武州飯能の羅漢山が最適地」と主張申しあげたことから両者の激論に集中され、しまいには、山岡が岩倉を「馬鹿者」呼ばわりする破目にまで追い込まれてしまった。武州飯能を戦火から救おうと身替りまで出して心配した山岡の激昂した右大臣を馬鹿呼ばわりするまで、この飯能を思っていた山岡鉄太郎の徹した信念が遂に勝星になったのである。激論の判定は天皇一任となったが、そのときの明治天皇の一言は「岩倉は馬鹿をいうから馬鹿といわれるのだから馬鹿をいうなよ」と馬鹿という字を三言続けられたといわれ、そのときすでに天皇の御心は、武州飯能の羅漢山が御統監地と心に決められたことであつたらう。五日後再び近臣会議が開かれた。近臣に向っていわれたお言葉はただひとつ「近衛諸兵の統監には、武州羅漢山に行く」時は四月十七日、会議は静かに終り、近臣達の心は、この一瞬で早くも武州羅漢山にとんだ。

日本最初の演習絵図

武州飯能の羅漢山を、近衛諸兵の演習地に決められた明治天皇は、審判官長を当時の陸軍中将彰仁親王、審判官に陸軍大佐阿武素行、西軍指揮官川上操六陸軍大佐に命じて

羅漢山一帯に於ける陸軍大演習の戦闘想定と、やがて展開されるであろうという外敵と戦争に勝ち抜く戦略や兵士の士気高揚一路の訓練計画を進めさせた。明治十八年四月十八日、夜がしらじらと明けそめたころ、明治天皇の御乗馬姿は羅漢山頂にさっそうとして朝日に輝いていた。そして飯能周辺に展開された近衛の歩兵、騎兵、砲兵達の東西両軍の戦闘工作の様子をデット見守っていたのである。東軍は野田村滝坂口から双柳村、笹井村鳥坂口から山道伝いに中山天神坂と二隊が羅漢山奪取をめざして西方の進軍。一軍は山麓の各所に伏兵を配してこれを迎え撃つ陣形。神久山から山砲の火ぶたが切られたときには、この演習を観戦した飯能地方の人達は、飯能戦争で焼けこがされた十数年前のみぢめさとは違った感激で皇軍の偉力に目を見張ったことであつたらう。そして明治天皇がわが郷土のゆかり深い羅漢山にお成りになって、この戦況を見守ってくださるのだという感慨は、悲劇の飯能戦争を忘れさせていた。東西両軍の激戦は、羅漢山を中心に神久山、多峰主山一帯に銃砲のとどろき、地雷火の爆発で、火煙は空をおおい、ときの声が山峡にこだまして、まさにこの時の飯能は戦争絵図にいろどられていた。演習は、激戦ののち中居村を中心にした白兵戦で休戦ラッパがなり響いたのだが、このとき明治天皇の御乗馬の英姿は中居村の第二天覧所にも進められていた。

朝日山に造営誘致運動

東京代々木の明治神宮は、明治天皇、昭憲皇太后をまつり、その境内二万二千坪、本殿は流れ造りの百平方メートル、明治天皇御物の装束、文具じゅう器類百六点、昭憲皇太后御物三十一、両陛下御一代絵画八十点など重要文化財の多い宝物が納められ、伊勢神宮に次ぐ日本最高位の神宮で、とくに約三百万平方メートルにわたる外苑には競技場あり公園あり「神宮の森」として国民宗敬の的である。その明治神宮が飯能町大河原の朝日山に建ち、この周辺一帯が「神宮の森」に乞うとしたことがあったのを、いまの六十代の飯能の人達は、夢物語りとして明治百年の語り草にしている。明治四十五年明治天皇が崩御遊ばされると同時に、日本国民の天皇をおしたいする念が日に日にたかまり、遂には天皇の御霊をおまつり申す神宮創建の要望が全国民の与論となった。国会でもこの国民の要望にこたえて神宮創設を国家の事業として遂行することを議決したのに対し、大正天皇は、明治天皇御鎮祭の議を御治定あらせられた。大正二年のことである。このとき飯能の町にほうはいとして明治神宮、御造営敷き地誘致運動が起きた。

「埼玉県入間郡飯能町大字大河原朝日山一円は地域約五十万平方メートルを明治天皇御祭神の神宮御造営地として最適当であるから、神宮御建設御位置に御選定なされるよう」との請願書が、ときの渡辺千秋宮内大臣、渋沢栄一明治神宮建設委員長宛に提出されたのがこの運動の始まりであった。最後はたとえ「まぼろしの明治神宮」となったが、当時の飯能町民が天皇をおしたい申しあげた真剣な気持ちは感激涙するものがあつたことだろう。

天皇と由緒深い飯能

飯能が明治神宮御造営地誘致に全町民が熱狂したのは「明治天皇と飯能」のあまりにも深い由緒のつながりを持っていたからだ。

明治十六年四月十七日羅漢山一帯に繰り展げられた近衛旅団演習御統裁のため飯能にお出ましになり、二日間にわたり愛馬にまたがった御英姿で飯能町民に親しくお接しなされたこと、この御統裁仰せ出も飯能戦争で悲壮な戦いをして敗れた振武軍をおなぐさめになった御心から、みずから「飯能に行く」といわれるほど武蔵の飯能をお気にとめていられたこと、しかも飯能町民は、いままで羅漢山と呼んでいた乗馬姿の天皇が演習を親しく御覧になったことから天覧山と呼ぶようになった忘れられない感激のことなどが、天皇の御霊を飯能におまつりしたいという真情があふれたのであつた。それに飯能が生んだ明治時代の女性学者田中かく女史が東京に出て、当時の宮内省に勤務してい

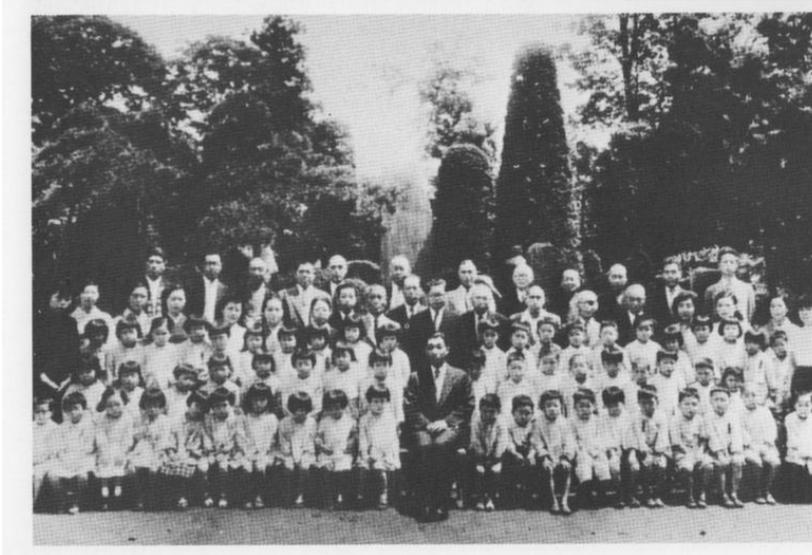
た井上頼圀に師事していて、同じ机をならべていた姉小路良子女史が明治天皇の権典侍としておそばに奉仕していたことから井上頼圀、姉小路良子女史を通じて飯能と宮内省宮中へのつながりの橋渡しの役を買って出たことも御造営地誘致運動の大きな拍車となった。その田中かく女史は、一誠堂田中忠三の一女で安政六年の生れ。九歳の時から十四歳までは飯能で学者の小能志摩の塾で勉強してから上京して宮内省勤務の井上頼圀に師事した明治時代の飯能切っの立派な女学者であった。こうした重なる縁故に心を踊らせた飯能の町民は、請願書への署名調印に明治神宮の夢を描きながら筆をとり、請願書のつづりには、各町内ごとに山と積まれて行ったのだったが。

聖徳しのぶ一大神域

明治神宮を朝日山に誘致の声が出ると同時に、全町総けっ起の神宮建設請願委員会が結成された。もちろん委員長は当時の町長小能五郎、副委員長は双木八郎、金子忠五郎、吉田筆吉の三人。委員は全町を網羅した名門、有力者三十六人。そして常任委員として正副委員長のほか大河原政五郎、同浅吉、藤田愛助、小山八郎平、新井清平、平沼伊助、金子周策、岩沢庄三九、小川清、石井代吉、佐野今五郎が就任して請願の尖兵として大活躍を始めた。町会はこの請願を万場一致で議決したことはもちろんのことだった。請願書の内容は「飯能町大字大河原、朝日山一円の地域約十五万坪。今般明治天皇陛下こう古未曾有の聖徳偉業をとしへに仰ぎ奉るため、神宮御建設のことを承り、ついではこの地域は広く高く水も清く、そして明望に富み俗界と離れ静寂そのものところ。帝都との交通も良く、とくに本町は明治天皇行幸の由緒もあり、神宮御造営地として最適地と拝察致しますので、神宮御建設御位置に御選定なされるよう本町町会の議決をもって請願致します。大正二年二月とある。それに提供地域の神域として好条件の内容と地図のほか選定の場合は土地及び労力に関し応分を献納し、町民一丸となって熱意をささげることを付記した。提供地域内容の一項の中に「山あり、川あり、泉が湧きでており、人工的風致に富むばかりでなく、本町が遊園地としている明治天皇御野立所の天覧山を中心に多峰主山一帯を包含し、マツ、ツツジ、ウメ、サクラ、モミヂ四季とりどりの風光明眉の地を神苑になされれば、まさに一大神域が生まれる」と、神宮建設を願う町民の夢を乗せていた。

遂に代々木に決まる

明治天皇がおかくれになってから二年ほどして、昭憲皇太后が天皇のあとをお追いになって崩御された。大正天皇は天皇、皇太后両御祭神合祭の議を御治定なされた。神宮御造営地を朝日山にと誘致運動に大わらわの飯能町民の夢は更に大きくふくらみ、大正三年双木八郎町長になったとき、ますます盛りあがってきて赤誠を示す第二次請願ともいう追補陳情書を提出した。明治神宮奉祭調査会の官制が公布され、奉祭に関する諸般の事項調査が着手されようとする矢先きだった。名栗川の溪流は伊勢神宮の五十鈴川に似ており、朝日山は伊勢の神路山のようにビヨウブを立て回したような半円形の山で神霊の鎮座なされる靈域にふさわしいこと、災害やばい煙紅塵などの公害がないこと、東京が近く参拝に便利なことなどを好条件を理由にあげた追補陳情書だった。当時の飯能の町民にしてみれば、朝日山は神域に好適地なことを自負し、さらに敷地買上げについても国家事業の負担を軽くし、天皇の御聖徳に奉仕しようとする町民の熱意が奉祭調査会を動かすことを信じての再度の陳情書で、期して待つべきものがあつた。それから一年後の大正四年、内務省は告示をもって「東京府下代々木に明治神宮の社殿を建設し、明治天皇、昭憲皇太后二柱を奉祭し、社格を官幣大社に列せられる旨のおおせ出があつた」と明治神宮御造営地決定を発表した。これは万事休した飯能町民悲嘆の一瞬であつた。しかし、明治天皇と飯能の由緒はいつまでもいつまでも消えない天覧山があり、伸びゆく飯能観光の表看板になっていることを思うと、決して悔いの残らない明治神宮誘致運動であつた。



63 飯能幼稚園開園式（昭和二八年）

庶民の広場だった観音寺の森にオルガンと可愛い声がこだました。社会奉仕を永年手がけてきた服部融泰園長の幼児教育への進出は、仏教思想具顕のための実践であつたらう。写真は、五月、高松宮をお迎えしての開園式の記念撮影。

1953. 05. 21 飯能幼稚園が山手町に開園する（上の写真）。

1953. 06. 09 高松宮殿下 県下の産業民生事業ご視察のため来飯される。

※ 菩提寺の故服部融泰住職とは、生前に幾度か言葉を交わしている。生き方についてなど厳しい言葉を発しながらも、その言葉には温もりがあった。